

巻頭言

私たちはアーティスト

——あなたはどのような未来を描こうとしているのか——

三 原 正 資

『華嚴經』に「心如工畫師しんにょくえじ」ということばがある。私たちの心はアーティストのようなもので、過去、現在、未来の人々や世界の姿を各人各様に描いていると言う。私はこのことばを宗祖の『開目抄』から知った。

天台智者大師一人此法門を得給えり。華嚴經の澄観、此義を盗んで華嚴經の心如工畫師の文たましいの神とす。(定遺五七八頁)

「此法門」とは一念三千の教え。一念三千を明かした『摩訶止観』(関口真大校注 岩波文庫 一九六六)は「心如工畫師」について次のように述べている。

もし華嚴に「心は工たくみなる画師が種々の五陰を画くがごとし」というによらば、界内・界外の一切世間のなかに、心によって造らざるはなし。(巻第五の上)

このように私たちがアーティストのように外界をさまざまに描くシステムを、蓑輪顕量師は次のように説明している。

次のスライド、何でしょう。ぱつと見てください。(略)

私たちが外界を見たときに、目を通じて心の中に映像が描かれます。イメージが描かれると言ってもいいと思います。そのイメージに対して「あ、これは何々だ」という判断を起こしている例として出させていただきました。

これを見て、漢字の「大」という答え、それから、「人間が両手を広げている姿」。(略) これ、本来は何かというところ、白地のところに黒で、ただ線を引いただけなのです。漢字を知らない外国の人がぱつと見たら、「大」だと思わないです。

(第五十一回中央教化研究会議 基調講演「仏教の止観とマインドフルネス」)

私たちが外界を見る場合、各々が形成してきたイメージに基づいて判断し、アーティストのように外界を種々に描いているという。そのため、私たちは同じものを見ながらも、全くちがう映像を認識している。

(三・一一)後の第四十五回中央教化研究会議にお招きした内山節氏たかし(哲学者)は、このイメージが外界の認識を変えた例について、『新・幸福論 近現代の次に来るもの』(新潮選書 二〇一三)の中で考察している。

私は子どものときからよく釣りをしていた。二十歳くらいからは自分で車を運転して釣りに行くようになり、（略）こうして出会った農山村の多くは疲弊していた。一九七〇年代といえど戦後の高度成長が最盛期に入っていた頃である。

ところが、内山氏によると実際の農山村は人間関係は豊かでモノは溢れていたという。ところが……

農山村は貧しかったのである。なぜなら、そういうイメージが定着していたからだ。農村の人々を追いつめていったのは、農村の現実ではなく、イメージだったのである。イメージが人間を支配し、それが社会に大きな影響をもたらしていた。

原子力もその例である。

広島被爆遺児の作品集『原爆の子』（岩波書店 一九五二）の「序」おさだあらた（編者長田新）に見られる「原子力」のイメージは驚くほど楽観的である。

原子力が持つ「偉大な善をもたらす」道—原子力の平和的利用に力強い期待をかけている。広島街々に原子エネルギーを動力とする燈火が輝き、電車が走り、工場の機械が廻轉し、そして世界最初の原子力による船が、広島港から平和な瀬戸内海へ出て行くことを。実際広島こそ平和的條件における原子力時代の誕生地でなくてはならない。

このような現代文明に対する楽観的なイメージの結果として、現代の都市文明があり、その対極に過疎化していく地方がある。だが、この明暗のイメージは正しいのだろうか。

また『摩訶止観』（巻第五の上）には「正法念にいわく」として引用されている文章がある。

「画師の手が五彩を画き出すが如し、黒・青・赤・黄・白・白白なり。画手は心を譬え、黒色は地獄の陰を譬え、青色は鬼を譬え、赤は畜を譬え、黄は修羅を譬え、白は人を譬え、白白は天を譬う」と。

二〇二〇年の夏、「BLACK LIVES MATTER」（黒人のいのちも大切だ）のプラカードが各国の路上に溢れた。色のイメージが差別や偏見と結びついてはいけな。性的少数者であることを公表した浄土宗僧侶・西村宏堂師は語る。

阿弥陀経のこんな一節を大事にしている。

「青色青光 黄色黄光 赤色赤光 白色白光」

極楽では、青色の蓮の花は青く光る。黄色の蓮は黄色く光る。「それぞれ異なる色で輝いているから素晴らしい」という意味だ。

『毎日新聞』 二〇二〇年一〇月三日〈個性を彩る メイク達人の僧侶〉

さて、ウイルス禍に翻弄された「TOKYO 2020」の初冬の太陽の光の中、丸の内にはタワービルが林立している。その下を行き交う人々は、どのようなイメージでこの光景を見ているのだろうか。「現代的なシステムの歯車」（『新・幸福論』）として管理され満足している人は、輝かしい思いで眺めているにちがいない。建築家・隈研吾氏は指摘する。

二〇世紀初頭に登場した高層オフィスビル（略）、その閉じた箱で働くことが社会のヒエラルキーの上位に在ることを意味し、誰も疑わなかった。

（『日本経済新聞』 二〇二〇年二月一九日 〈セルフメイドの空間〉）

だが、彼らも、いつの日か、異なるイメージで同じ風景を見るようになる。  
隈氏は続いて次のように述べる。

（略）都市から、ついに脱出する時が来たのである。そういう方向に舵を切っていたら、日本の田舎はもっと楽しくなり、都市はもっと風通しがいい場所になるのではないか。「イメージの転換は人間たちの認識を変える」と考える内山氏は次のように断言する。

私たちの社会は、近現代の幻想からようやく解き放たれはじめたのである。（略）ゆえに今日とはローカリズムの時代でもある。

いまのイメージでは農山村は自然と人間の里であり、共同体＝コミュニティが残っている里である。(略)そしてこのイメージに包まれて農山村へ移住を試みる若者も多くなり、(略)だが実際には一九七〇年頃と較べるなら、農山村はますます苦しくなってきた。(略)ところが村の暮らしはいいと感じる。何が変わったのか。イメージである。

では、なぜ、イメージは変わったのか。

それは、人々が先入観、幻想を離れたためである。私たちは、刷り込まれた幻想を打ち破って日本の現在、未来の姿を描きたい。

異念なく一心に靈山浄土を期せらるべし。心の師とはなるとも心を師とせざれ。

(『曾谷入道殿御返事』 定遺九一三頁)

という宗祖のことばを、私たちがイメージを転換し、認識を変えろという意味に受けとることもできる。

宗祖は『立正安国論』に示されている。

汝はやく信仰の寸心を改めてすみやかに実乗の一善に帰せよ。しかればすなわち三界はみな仏国なり。

多くの人々が西土教主の浄土への再生を願った時代に、この穢土の世界こそ真実の浄土である。と人々のイメージを転換し、私たちの認識を変えようとした宗祖の誕生から八〇〇年の日を迎える。

とはいえ、コロナ禍はもとより、気候変動、人権抑圧、そして核の危機と人々の「嘆」きの声は強くなるばかり。世界は穢土を浄土へと変える無数の菩薩の出現を願っている。